米軍機の騒音 100デシベル超を記録

嘉手納で三連協発表

【中部】北谷町、嘉手納町、沖縄市で構成する嘉手納飛行場に関する三市町連絡協議会（三連協、会長野国昌春北谷町長）は23日、嘉手納基地を離着陸する米軍機の目視調査で、騒音の最高値がFA18戦闘攻撃機の100・4デシベルを記録したと発表した。米軍機の目視回数は計124回で、昨年度の3回の調査のいずれよりも少なかった。

調査は、16日午前8時～午後6時、道の駅かでな、ちゃたんニライセンター、沖縄市のコリンザで実施した。騒音の最高値は、FA18が沖縄市のコリンザ上空を通過した午後4時15分に記録。100デシベルは電車通過時の線路脇で発生する音量と同等という。次いで、午前9時37分に離陸したF16戦闘機の95・5デシベルだった。

飛行の目視回数の内訳は常駐機86回、外来機38回だった。2月の調査は172回、2014年11月は180回、同年4月は229回で、三連協によると、通常2回の午前訓練が1回だったことなどが、減った原因の一つという。

離着陸回数は97回でF15戦闘機が50回と最も多く、次いでF16戦闘機による20回。市街地上空飛行は15回だった。三連協事務局は、「関係機関へ要請する際の基礎資料にしたい」としている。

宮森小墜落事故 原告女性ら証言

嘉手納爆音訴訟

【沖縄】米軍嘉手納基地の周辺住民が起こした第3次嘉手納基地爆音差し止め訴訟の原告本人尋問が24日、那覇地裁沖縄支部（藤倉徹也裁判長）であった。宮森小学校での米軍ジェット機墜落事故に遭った、原告女性が「爆音がすると、落ちるのではないかと不安になる」と証言し、深夜早朝の飛行を差し止めるよう求めた。

証言した、うるま市の伊波純子さん(66)は、1959年の事故当時、宮森小5年。墜落時に空が真っ赤に見えた様子や、大けがをした児童の姿などを語り「癒えない傷がいまだに残っている」と述べた。「ずっと米軍基地を抱えて生きている。眠る時間だけでも飛行を止めてほしい」と訴えた。

このほか、うるま市の旧石川市地域に住む原告3人の尋問も行われた。原告は「米軍は自国でも昼夜問わず、住宅街の上を飛ぶのか。平穏な空を返してほしい」などと訴えた。

国側は、騒音の頻度や、健康被害に関する診断結果、防音工事の効果などについて質問した。

23日には、沖縄市と嘉手納町の原告6人への尋問が行われた。

8月20日にうるま市具志川、同21日に読谷村に住む原告の本人尋問がある。